

## 父親から母親への情緒的サポートが母親の 育児不安の緩和に及ぼす影響

### How fathers' emotional support reduce mothers' parenting anxieties

高橋桂子・佐野綾香

Keiko TAKAHASHI and Ayaka SANO

#### 1. はじめに

わが国の合計特殊出生率は、1989年の1.57ショックを経て、2008年には1.37と大きく低くしている。少子化には晩婚化・未婚化における親世代の縮小と、子どもの産み方の変化が同時に影響する。そうした中、エンゼルプランやワークライフバランス感章など、行政も積極的に少子化問題について取り組んでいる。しかし、母親の育児不安は依然として高く、加藤(2001)の調査では「育児でイライラすることが多い」と答える母親は1981年の10.8%から2000年の30.1%に増加している。このように、行政による少子化対策が実施されているにもかかわらず、母親が感じる育児不安は高いのが現状である。

本研究は、夫から妻への「情緒的サポート」という概念に注目して、父親の育児や家事へのかかわりが、母親の育児不安の低下にどのような影響を与えるか検討することを目的とする。具体的には、新潟市東区の未就学児の子どもを持つ女性を対象に実施した独自アンケート調査をもとに多変量解析により、夫婦の会話頻度と、父親から母親への「情緒的サポート」が母親の育児不安に与える影響、父親の育児かかわり、父親の家事かかわりが母親の育児不安に与える影響について検討を行う。

#### 2. 先行研究と仮説

##### (1) 先行研究

夫婦の会話頻度が父親の育児かかわりに及ぼす影響に関する研究には石井・加藤・牧野・土谷(2002)がある。石井ら(2002)は、夫婦の会話頻度が多いほど、夫の育児かかわりも頻繁になること( $\beta = 0.247, p < 0.01$ )、夫婦の会話頻度が多いほど、妻の育児不安を減少させること( $\beta = -0.196, p < 0.05$ )、を指摘した。また、夫の育児かかわりが妻の育児不安の緩和に与える影響に関する研究には松田(2001)がある。松田(2001)による育児ネットワーク構造と母親のWell-Beingを捉える枠組みでは、育児に何らかの形で関わる人たちを「社会的ネットワーク」、その人たちからの個々具体的なサポートの内容を「実行的なサポート」として捉えた上で、夫の育児参加が多いほど、妻の育児不安が低く( $\beta = -0.160, p < 0.01$ )、その結果、母親の生活満足度が高くなること( $\beta = 0.168, p < 0.01$ )を明らかにしている。岡本(2003)は、夫が育児の相談相手にいつもなっていたり、夫が妻への気遣いをいつもしてくれている場合は、妻の育児不安が小さくなることを指摘している。妻の精神的サポートを行う者として夫の存在は大きいといえ、妻とのコミュニケーションや気遣いによって、夫が妻を支えてくれていると妻自身が実感することが、妻の精神的安定のために必要であるとしている。

## (2) 本研究の仮説と枠組み

石井ら(2002)の研究では、夫婦の会話頻度が父親の育児かかわりに与える影響、夫婦の会話頻度が母親の育児不安に与える影響について検討されている。しかし、父親の育児かかわりが母親の育児不安に与える影響については、検討されていない。また、松田の研究では夫婦の会話頻度との関係が検討されていない。そこで本研究では、「夫婦の会話頻度」を先行変数、「母親の育児不安」を従属変数とし、「父親の育児かかわり」、「父親の家事かかわり」、「父親から母親への情緒的サポート」との関連について検討を行うこととした。

本研究では、母親の育児不安の緩和に影響を与える要因を中心に仮説を設定する。

- 仮説1：父親の育児かかわりが大きいほど、母親の育児不安は小さくなる。
- 仮説2：父親の家事かかわりが大きいほど、母親の育児不安は小さくなる。
- 仮説3：父親から母親への情緒的サポートが大きいほど、母親の育児不安は小さくなる。
- 仮説4：夫婦の会話頻度が大きいほど、父親の育児かかわり、父親の家事かかわり、父親からの情緒的サポートも大きくなる。

## 3. 研究方法

### (1) 調査の実施概要

3部構成(基本的属性、子育てや家事の役割分担に関する項目、夫婦に関する項目や意識)からなるアンケート調査票を独自に設計した。それを2009年2月、新潟市東区にある保育園に子どもを預ける20~40代の女性を対象に配布した(留置調査法)。私立保育園3園から計143人の協力を得た(回収率:61.4%)。分析に使用したデータは重要な変数に欠損値のない127部(有効回収率:54.3%)である。

対象者の基本的属性は次のようである。平均年齢は34.33歳(SD=4.56)、子どもの数の平均は2.01人(SD=0.68)、未就の平均年齢は3.74歳(SD=1.80)である。雇用形態はフルタイム労働42.2%、パートタイム労働45.2%、自営業3.9%、未就労7%である。最終学歴は中学校が3.9%、高等学校が44.5%、専門学校・高専・短大が44.5%、大学以上が7%である。また世帯構成は回答者自身の両親との同居が3.9%、隣居が4.7%、別居が75%、夫の両親との同居が24.2%、隣居が6.3%、別居が65.6%であった。全体として60.9%が核家族である。新潟市内の核家族世帯割合は53.9%である(2000年)。今回の対象者は新潟市の平均的な世帯構成より、親世代との同居割合が低い世帯といえる。

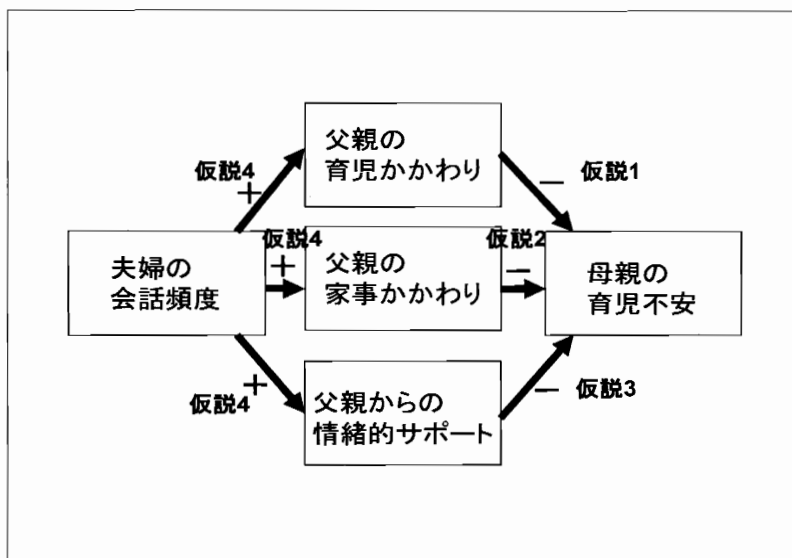


図1 研究の枠組み

(2) 使用した変数

① 従属変数

母親の育児不安度は、「疲れやストレスがたまりイライラする」、「自分はいまよく子育てをしていない」、「子育てをどうしたらいいかわからなくなる」、「自分の子育ての方法はこれでいいのかと思う」、「子育てをはなれて一人になりたい」、「育児や家事など、何もしたくなくなる」の6項目である。「よくそう思う」=4点、「ときどきそう思う」=3点、「いづらかそう思う」=2点、「まったくそう思わない」=1点の得点である。数値が高まるほど、母親の育児不安度が高まることを意味する。下位尺度の内的一貫性を示す信頼性係数 $\alpha$ は.870である。

従属変数である「母親の育児不安」の分布を示したものが図1である。正規性の検定をおこなったところ、この従属変数は正規分布にしたがうことが確認された。

② 説明変数

父親の「育児かかわり」（以後、「父親の育児かかわり」）、父親の「家事かかわり」（以後、「父親の家事かかわり」）、父親から母親への「情緒的サポート」（以後、「情緒的サポート」）、夫婦の「会話頻度」（以後、「夫婦の会話頻度」）の4変数である。

「父親の育児かかわり」は「風呂着替えなどの世話」、「保育所への送り迎え」、「寝かしつける」、「外で体を使って遊ぶ」、「仕事を休んで病気の子どもを介護する」、「子どもを医者連れていく」、「保育所・幼稚園などの行事に参加する」の7項目である。

「主に夫」を5点、「夫の方が多い」が4点、「夫婦同じ位」を3点、「妻の方が多い」を2点、「主に妻」を1点として、7項目の合計点を算出した。数値が高まるほど、父親の育児かかわりが高まることを意味する ( $\alpha = .789$ )。

「父親の家事かかわり」は「食料品の買い出し」、「料理」、「食器洗い」、「洗濯」、「部屋の掃除」、「ごみ捨て」、「家電の修理・修繕」、「家族のマネジメント」の8項目である。「主に夫」を5点、「夫の方が多い」が4点、「夫婦同じ位」を3点、「妻の方が多い」を2点、「主に妻」を1点として、8項目の合計点を算出した。数値が高まるほど、父親の家事かかわりが高まることを意味する ( $\alpha = .702$ )。

「情緒的サポート」は「あなたの能力・努力を高く評価してくれる」、「あなたの意見を尊重してくれる」、「あなたの愚痴を聞いてくれる」、「申し分のない結婚生活を送っている」、「あなたと夫の関係は、とても安定している」、「夫婦の絆は強い」の6項目である。「そう思う」を4点、「ややそう思う」を3点、「あまり思わない」を2点、「思わない」を1点として、6項目の合計点を算出した。数値が高まるほど、情緒的サポートが高まることを意味する ( $\alpha = .928$ )。

「夫婦の会話頻度」は「子どもの話以外で、夫婦で会話することはどれくらいありますか」の1項目である。「大変多い」を4点、「まあまあある」を3点、「あまりない」を2点、「ほとんどない」を1点とした。

「保育支援」は「仕事で帰りが遅くなるとき、子

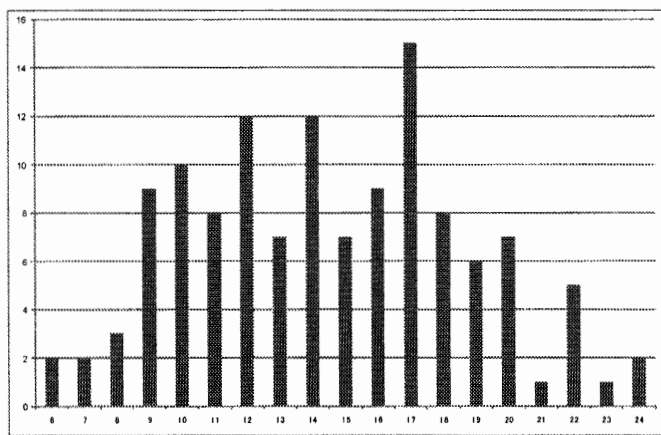


図2 従属変数の分布

表1 変数の相関マトリクス

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 母親の育児不安	1									
2 父親の育児かかわり	-.176	1								
3 父親の家事かかわり	-.198 *	.521 ***	1							
4 情緒的サポート	-.378 ***	.255 **	.300 **	1						
5 保育支援	-.251 **	.114	.321 ***	.291 **	1					
6 夫婦の会話頻度	-.276 **	.265 **	.292 **	.615 ***	.213 *	1				
7 一週間の夕食回数	-.154	.462 ***	.101	.149	-.013	.228 *	1			
8 同居ダミー(妻方)	-.184	.005	.126	-.010	.190	-.112	-.151	1		
9 フルタイムダミー	-.204 *	.371 ***	.330 ***	.178 *	.204 *	.119	.098	-.146	1	
10 子どもの数	.004	.006	.113	.026	.077	-.043	.001	.055	-.119	1
11 末子の年齢	.157	-.052	-.065	-.025	-.071	.076	-.022	-.014	.060	-.134

どもの世話をしてくれる人」、「子どもを病院に連れて行けないとき、連れて行ってくれたり病気の子どもを看護してくれる人」、「子どもが保育所・幼稚園等で問題を起こしたとき、相談に乗ってくれる人」の3項目である。「常に誰かいる」を3点、「探せばいる」を2点、「いない」を1点とした。数値が高まるほど、保育支援が多くなることを意味する( $\alpha = .806$ )。

### (3) 変数の相関

変数の相関を表1に示す。「フルタイムダミー」とは、現在フルタイムで勤めている場合を1、パートタイム、自営業、内職や勤めていない場合を0としたものである。

「母親の育児不安」と有意にマイナスの相関を示すものは、「父親の家事かかわり」、「情緒的サポート」、「保育支援」、「夫婦の会話頻度」と「フルタイムダミー」である。相関マトリクスから、「父親の家事かかわり」が大きいと母親が認識しているほど、また父親から母親への「情緒的サポート」が大きいと母親が認識しているほど、さらに母親がもつ「保育支援」が多いほど、「夫婦の会話頻度」が大きいほど、そして母親がフルタイムで働いているほど、母親の育児不安が低下することが明らかになった。

なお、この相関分析で主要な説明変数の1つとして想定した「父親の育児かかわり」が有意な結果を示さなかった。「母親の育児不安」と「父親の育児かかわり」の得点状況を散布図に示して確認したところ、父親の育児かかわりが高くても母親の育児不安得点が高いもの、逆に、父親の育児かかわりが低くても母親の育児不安得点が高いものが一定数存在することが確認された。これらを外れ値として処理すればマイナスの相関を示すものの、データ数が127とあまり多くない。そこで、今回は外れ値とし

て処理せずに分析を進めた。

## 4. 分析の結果

### (1) 回帰分析

「母親の育児不安」を従属変数とする回帰分析を行った結果、父親から母親への「情緒的サポート」( $\beta = -.243, p < .1$ )が大きくなるほど、母親が自身の両親と同居していれば( $\beta = -.220, p < .01$ )、母親の育児不安が低下することが明らかになった。しかしながら、一般的には、末子年齢が高くなるほど、母親の育児不安は低くなる想定されるが、今回のデータでは末子年齢が高くなるほど、母親の育児不安が高くなる、という予想に反した結果を示した。加えて、単相関では父親の育児かかわりと家事かかわり、保育支援、夫婦の会話頻度、フルタイム労働ダミーについては高い相関が出ているが、回帰分析では有意な結果とならなかった。これらは今後の課題である。

表2 母親の育児不安に対する回帰分析

	母親の育児不安	
	$\beta$	単相関
父親の育児かかわり	.072	-.18
父親の家事かかわり	.031	-.20
情緒的サポート	-.243 +	-.38
保育支援	-.045	-.25
夫婦の会話頻度	-.165	-.28
一週間の夕食回数	-.125	-.15
同居ダミー(妻方)	-.220 **	-.18
フルタイムダミー	-.086	-.20
子どもの数	.078	.00
末子の年齢	.200 +	.16
R2乗値	.118	
F値	2.060 *	

(2) パス解析

以上の結果をもとに、パス解析を行った(図3)。「父親の育児かかわりが大きいほど、母親の育児不安は小さくなる。」とした仮説1は、今回の分析では両変数間に有意なパスが確認されず、仮説1は支持されなかった。「父親の家事かかわりが大きいほど、母親の育児不安は小さくなる」とした仮説2も、仮説1同様、支持されなかった。

「父親から母親への情緒的サポートが大きいほど、母親の育児不安は小さくなる。」とした仮説3は、父親から母親への情緒的サポートが大きくなるほど( $\beta = -.37, p < .001$ )、母親の育児不安は有意に低下する結果を示し、支持された。また、「夫婦の会話頻度が大きいほど、父親の育児かかわり、父親の家事かかわり、父親からの情緒的サポートも大きくなる。」とした仮説4は、夫婦の会話頻度が大きくなるほど、父親の育児かかわり( $\beta = .24, p < .01$ )、父親の家事かかわり( $\beta = .30, p < .001$ )、父親からの情緒的サポート( $\beta = .61, p < .001$ )も有意に大きくなる結果を示し、仮説4も支持された。

間接効果の大きさに注目される変数に「夫婦の会話頻度」がある。この変数の母親の育児不安に与える係数は $\beta = -.23$ と大きい。

さて、一般に、父親の家事関わりは、育児かかわ

りと家事かかわりに二分される。しかしながら、家事は常に育児と家事に分離されるものでもないだろう。たとえば、「繰り延べ可能な家事」(子供とあそぶ、掃除)と「繰り延べ不可能な家事」(子供のおむつの交換、食事づくりなど)にわけられることも可能である(例えば、永井(1992))。そこで、育児と家事として多くの先行研究で用意されている選択肢(父親の育児かかわり=7項目、父親の家事かかわり=8項目、1週間の夕食回数)をすべて投入して因子分析を行ったところ、2因子が抽出された。

1つめは、父親の育児かかわりから「仕事を休んで病気の子どもを介護する」、「子どもを医者に連れていく」の2項目、父親の家事かかわりから「食料品の買い出し」、「料理」、「食器洗い」、「部屋の掃除」の6項目であった( $\alpha = .870$ )。これらは、日常的な育児・家事かかわりであるので、「父親ルーティンワーク」と名付けた。

2つめは、1週間の夕食回数と、父親の育児かかわりから「風呂着替えなどの世話」、「外で体を使って遊ぶ」、「行事に参加する」、「寝かしつける」の5項目である( $\alpha = .732$ )。これらは、概して父親にとっては楽しみながらできる家事関連であるので「父親エンジョイワーク」と名付けた。そこで、「父親の家事かかわり」と「父親の育児かかわり」

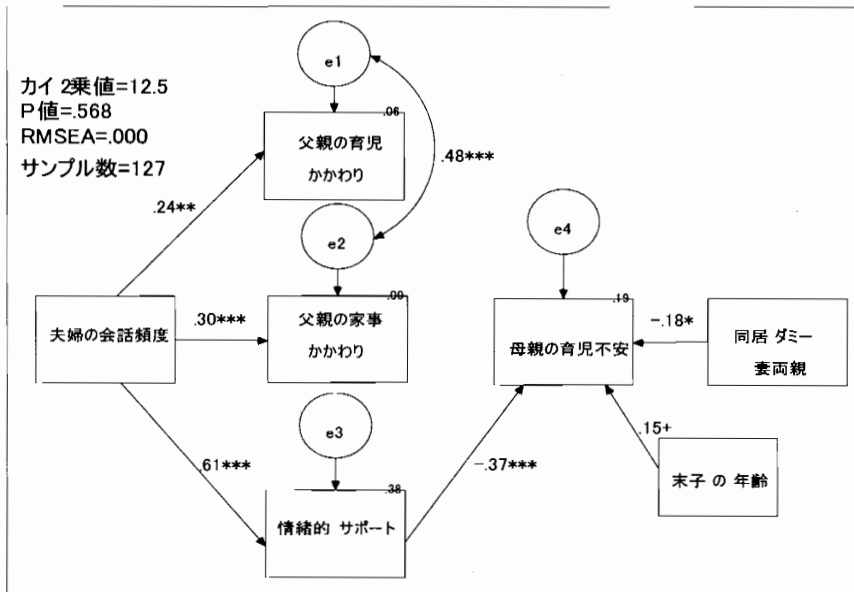


図3 パス解析

をこの2変数にかえて、同様のパス解析を行った。行為の性質に基づいて分類し直すことで新たなパスの発見を期待したが、図3の結果とほぼ同様なものであった。

## 5. 結 論

新潟市東区の未就学児の子どもを持つ女性を対象に実施した独自アンケート調査から、どのような要因が母親の育児不安を低下させるのか、について検討してきた。先行研究をもとに「夫婦の会話頻度」、父親から母親への「情緒的サポート」、父親の育児かかわり、父親の家事かかわりなどの変数を用意して分析した。今回のデータからは、母親の育児不安に影響を与える主な変数は、父親から母親への「情緒的サポート」であり、予想に反して父親の育児かかわり、父親の家事かかわりは有意な結果を得ることができなかった。

仮にこの分析結果が正しいとすると、新潟市東区では、母親の育児不安は、家事や育児といった実体的なことに父親が関与するのではなく、そういった実体的な関与がなくても、父親から母親に情緒的・精神的サポートを提供し、母親が夫婦関係の絆は強いと思えると、育児不安が低下する、ということを示す。これは、岡本（2003）の研究結果と類似した結果となった。しかしながら、依然として、松田（2001）の結果を追認できていない。なぜ、父親の育児かかわりや家事かかわりが、先行研究のように有意な影響をあたえなかったのか、という点については、今回、アンケート調査対象となった同地区でヒアリング調査を実施することで、何らかの手掛かりをつかみ、その原因を解明していく予定である。

## 謝 辞

本アンケート調査にご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

## 参考文献

石井クワンツ子・加藤邦子・牧野カツコ・上谷ミチ子（2002）「父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会背景の

異なる2つのコホート比較から」『発達心理学研究』第13巻, 第1号, 30-41

伊藤裕子・相良順子・池田政子（2007）「夫婦のコミュニケーションが夫婦関係満足度に及ぼす影響—自己啓発を中心に—」『文京学院大学研究紀要』Vol.9, No.1, 1-15

岡本絹子（2003）「親子クラブに属する母親の育児状況と育児不安」『川崎医療福祉学会誌』Vol.13, No.2, 325-332

加藤恵子・小林真（2001）「母親の育児不安とソーシャル・サポート」『富山大学教育実践総合センター紀要』No.2, 45-50

加藤曜子（2001）「児童相談所における児童虐待相談処理件数の増加要因に関する調査研究」（平成15年度厚生労働白書）

菅野幸恵・田矢幸江・柏木恵子（2003）「父母の子育て感情はどのように異なるか—子ども・子育てに対する感情への規定因の検討—」『発達研究』Vol.17, 39-52

菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉欠・菅原健介・北村俊則（2002）夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連：家族機能および両親の養育態度を媒介として」『教育心理学研究』50(2): 129-140  
松田茂樹（2001）「育児ネットワーク構造と母親の Well-Being」『社会学評論』52(1), 33-49

永井暁子（1992）「共働き夫婦の家事遂行」『家族社会学研究』No.4, 67-77

八重樫牧子・小河孝則（2002）「母親の子育て不安と母親の就労形態との関連性に関する研究」『川崎医療福祉学会誌』Vol.12, No.2, 219-239

山川玲子・柏木恵子（2004）「母親の子ども・育児感情—虐待の温床としての育児不安の要因—」『文京学院大学研究紀要』Vol.6, No.1, 185-200

## 参考URL

- ・国立社会保障・人口問題研究所 少子化情報ホームページ  
<http://www.ipss.go.jp/syoushika/>
- ・人口・世帯統計データ  
<http://bp-mobi.com/area-a/data/15201.html>